

平成25年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT25025

【プログラム名】古代人はどのように生き抜いたのか：古代人の生活を復元する



開催日：平成25年9月7日(土)

実施機関：札幌大学
(実施場所) (6号館)

実施代表者：高宮 広土
(所属・職名) (地域共創学群・教授)

受講生：高校生 12名

関連URL：<http://www.sapporo-u.ac.jp/news/contribution/2013/1001101650.html>

【実施内容】

1. 受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

- ・オリエンテーションでは、まず参加者を和ませるため、講師及び参加者全員の自己紹介を行った。
- ・パワーポイントを使って科研費の説明を行ったが、わかりやすく理解してもらうために、高宮が代表者の一人である「新学術領域環太平洋の環境文明史(領域代表 茨城大学 青山和夫)」のなかで、参加者のほとんどが知っているマヤ文明・アンデス文明において研究期間中どのようなことが判明したかを簡単に説明した。
- ・マヤ・アンデス文明の新発見について説明した後、高宮代表の「琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究」において明らかになったことを紹介した。特に参加者に伝えたかった点は、この4年半で琉球列島のような先史・原史時代を有する島が世界にほとんどない点である。参加者は、科研費の重要性を理解したと思う。
- ・今回のテーマ「古代人はどのように生き抜いたのか」では、人工・自然遺物の分析を通して、過去のヒトと文化を復元・解明することを目的としていた。そのため、千葉県や鹿児島県より、土器、脊椎動物、人骨及び貝類の分析を専門とするスペシャリストを招聘した。
- ・テーマを理解してもらうため、まずは高宮により「考古学・人類学からわかる過去のヒトと文化」という講義をPPTを使って実施した。そのなかで、考古学・人類学が対象とする先史時代について説明した。また、参加者に先史時代の長さを理解してもらうために、クイズ形式で、世界・日本・北海道における先史時代の占める割合について質問した。それぞれ、95%以上であることを説明し、考古学・人類学の必要性を説明した。
- ・考古学・人類学は、「発見」がメディアによって大きく取り上げられ、派手な学問と思われがちである。地道な研究分野であることを午後の企画で体験することになるが、これとは好対照である「インディージョーンズ<レイダース/失われたアーク>」を10分程上映し、本来の考古学や人類学はこの映画のように派手ではなく、地道な学問分野であることを強調した。
- ・以上2点を紹介した後、準備段階として、土器・脊椎動物・人骨・貝類・植物遺体からどのような過去が理解できるかを説明した。
- ・さらに、北海道の先史時代を理解してもらうため、本学埋蔵文化財展示室において北海道先史時代の展示の見学及び石器作りのデモンストレーションを行った。
- ・1mm前後の微小人工遺物、貝殻、脊椎動物骨及び炭化種子を回収する方法としてフローテーションという方法が知られている。午後の企画では、微小自然遺物の分析も実施するので、フローテーションの説明とそのやり方のデモンストレーションを行った。興味を持つ参加者も多く、何人かは実際フローテーションに挑戦していた。
- ・今回、工夫した最大の点は、上記したように各分野のスペシャリストによるマンツーマン的な分析方法の指導である。2～3名のグループに分けられた参加者は、約30分で一つの分野のレクチャーを受け、その後次の専門家へとローテーション式に実施した。
- ・それぞれの分野をよりいっそう理解してもらうために、講師には、それぞれ、土器、脊椎動物遺体、貝類、人骨及び植物遺体を用意してもらい、参加者に遺物を実際に手にとって触ってもらった。その後、分野ごとに分類の仕方、分類後にわかること、あるいはどのような点に注目すべきか等を説明した。
- ・今回の企画内容をより深く理解する、あるいは少しでも長く覚えておけるように、約30頁の資料も配布した。

・クッキータイムでは、それぞれの分野の講師に簡単なクイズをあらかじめ用意してもらい、クイズ大会を実施した。地元北海道に関する質問もあり（例えば「アイヌに神と呼ばれた魚は何？」「北海道のツブ貝は内地ではなんと呼ばれるか？」）、最多正解者には講師陣からすてきなプレゼントもある、ということで、クイズ大会は大盛況であった。このクイズ大会により、土器・脊椎動物・貝類・人骨・植物遺体の分析の重要性を感じてくれたと思う。

2. 当日のスケジュール

- 10:30-11:00 受付
- 11:00-11:30 開会式(あいさつ、オリエンテーション、科研費の説明)
- 11:30-12:15 講義:考古学・人類学からわかる過去のヒトと文化(高宮)
- 12:15-13:00 ランチ・埋蔵文化財展示室見学及び石器作りデモンストレーション
- 13:00-13:45 フローテーション
- 13:45-14:00 移動・休憩
- 14:00-14:30 5班に分かれて、土器、貝類、脊椎動物、人骨、植物種子分析の実習
- 14:30-15:00 同上
- 15:00-15:20 クッキータイム
- 15:20-15:50 5班に分かれて、土器、貝類、脊椎動物、人骨、植物種子分析の実習
- 15:50-16:20 同上
- 16:20-16:30 休憩
- 16:30-17:00 5班に分かれて、土器、貝類、脊椎動物、人骨、植物種子分析の実習
- 17:00-17:30 修了式(アンケート記入、未来博士号授与)
- 17:30 終了・解散

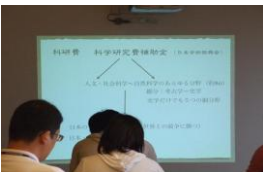
3. 実施の様子



参加者の自己紹介



参加者の自己紹介



科研費の説明



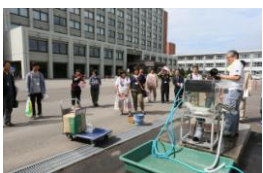
新学術領域
環太平洋の環境文明史
の説明
(マヤ文明・アンデス文明)



「考古学・人類学から
分かる過去のヒトと文化」
高宮による講義



札幌大学埋蔵文化財
展示室見学



フローテーションの説明



フローテーションにチャレンジ
する参加者



フローテーションより
回収されたウニのとげを
見つけて喜ぶ参加者



竹中氏による人骨分析に
についての説明



樋泉氏による脊椎動物
分析に関する説明



高宮による植物遺体分析に
ついての説明



新里氏による土器分析に
ついての説明



黒住氏による貝類分析に
ついての説明



クッキータイム中の
クイズ大会



未来博士号授与

4. 事務局との協力体制

- ・ 学術交流オフィス及び運営事業オフィスが実施の事務的役割を担った。
- ・ プログラム実施にあたり学内外の窓口となった。
- ・ 参加者申込の窓口として、状況把握、締切日程調整の他、参加者への連絡を行った。
- ・ 広報担当部署と連携しカメラマンを配置した。終了後ホームページに終了の記事を掲載した。

5. 広報活動

- ・ 高校訪問の職員を通じてポスター・チラシの配付を行った。
- ・ 歴史・文化専攻へ資料請求した高校生へ案内を行った。
- ・ 大学近隣の地区センターへチラシを持参し、地域回覧版等での周知協力を依頼した。
- ・ 大学ホームページに情報掲載を行った。
- ・ 北海道新聞に案内広告を掲載した。

6. 安全配慮

- ・ 大学が加入している保険が適用されることを確認した。
- ・ 医務室備えの救急箱を配置した。
- ・ 近隣の土曜日当番病院を確認した。

7. 今後の発展性、課題

- ・ ホーム・ページ、新聞広告あるいは高校へのチラシの配付など、広報活動を行ったが、なかなか高校生へは伝わらなかったようで、募集メ切を延期した。より効果的なPR方法を模索する必要があるのかも知れない。

【実施分担者】

黒住 耐二(千葉県立中央博物館)
 樋泉 岳二(早稲田大学)
 竹中 正巳(鹿児島女子短期大学)
 新里 貴之(鹿児島大学)

【実施協力者】 0 名

【事務担当者】

三浦 真一 (札幌大学学術交流オフィス 主幹)
 辻 みのり (札幌大学学術交流オフィス 主幹)
 佐々木敦子 (札幌大学運営事業オフィス)
 彦田 優子 (札幌大学運営事業オフィス)
 栄田 晴美 (札幌大学運営事業オフィス)